

園田天光光先生を偲ぶ会に出席して

～先生への感謝と決意を込めて～

去る3月13日(金)、「園田天光光先生を偲ぶ会」が、明治記念館「富士の間」で主催・文化団体竹光会によって開催されました。受付には、天光光先生の幅広いご活躍・人脈を象徴するかのよう、21を超える団体(NPO法人育櫻会、(公財)天風会、(一社)日本ラテンアメリカ婦人協会、NPO法人世界平和大使人形の館をつくる会、ブルガリア協会ソフィアクラブ、各種女性団体連合会、そしてNPO法人一冊の会など)が立ち、また、国会議員・外務省・大使関係の専用受付もありました。

当日は、朝8時半に役員が集合し、無事故かつ大成功に終わらせることを厳かに誓い合いました。一冊の会からは、受付、大使・企業社長の接待、通訳、案内係として6名が役員として参加いたしました。各団体役員には、外国の方もいらして、天光光先生が国際友好にも心をくだかれていたことを肌で感じました。三笠宮様、常陸宮様からも供花を頂戴し、祭壇の側に飾ってありました。特に目をひいたのは「正五位



在りし日の天光光先生



に叙す」の額でした。相馬雪香先生がお亡くなりになった時も「正五位」を叙されておりました。その時天光光先生はことのほか心から喜ばれたと伝え聞いておりました。この度一冊の会・永久最高顧問のお二人が揃って頂いた事に心より喜び、後継の私達は身が引き締まりました。供花は安倍総理を始め、副総理、幹事長、各大臣、各大使館など各方面からあり並べきれず、いくつかはお名前を白い紙に書いて掲示する程でした。

午前11時に開場の予定でしたが、先生とのお別れを惜しむたくさんの方で溢れたため、予定時間を早めての開場となりました。各界から1000名を超える方々と27大使館が心を寄せて下さり、祭壇に向かって献花とお祈りを捧げました。一冊の会からは、大槻明子会長、小山志賀子

理事長、石田尊昭副理事長、顧問の高木美智代衆院議員、左近充尚典御夫妻、親善大使のカズンやドン・アルマスなど35名が出席しました。各団体共に人数の制限がありましたので、参加したくてもできなかった多く

の皆さんにこの場をお借りしお詫びと感謝を申し上げます。

一冊の会顧問のリチャド・ラモエツィ・駐日レソト王国大使は「第3回国連防災世界会議」(3月14日～18日)に出席するため仙台市に移動しなければならず、代わりにリケレコ・マモサ・ラモエツィ大使令夫人が列席し、一冊の会最高顧問の佐藤啓太郎大使御夫妻、大濱明弘氏と同じ席で天光光先生を偲びました。(大槻と小山も、終了後にはすぐに仙台に向かいました。)



御来賓のお出迎え



御令息直飛人様とご挨拶

懐かしく感じると同時に、壮絶な戦争体験を生き抜いてこられた先生のメッセージが胸に迫りました。何もかもが当たり前の世の中になってしまった今、心の餓死防衛同盟が必要であると次の世代へのメッセージが語られており、先生の意味を受け継ぐ事を胸に誓いました。

会場の一角には、先生の写真が飾られており、若い頃の写真も拝見しました。きりりとされており、お会いしたことの無い若き日の先生もやはり力強い方であっただろう事を想像いたしました。

会が始まり、全員で黙祷を捧げた後、偲ぶ言葉を、(一社)日本ラテンアメリカ婦人協会会長の橋本久美子様(元橋本首相夫人)と、歌人の馬場あきこ様が捧げられました。

橋本様は、天光光先生から会長を受け継いだ時の思い出をお話しになり、馬場様は、それまで女性は踊ることが出来なかった能舞台で先生と女性としては初めて舞った思い出をお話になりました。また、馬場様は、天光光先生が生前に詠まれた歌を二首、紹介されました。

「人の世の地獄極楽ほかならず心にありて花火みており」

「往生は命の本(もと)に帰りつくよろこびと悟り心やすらぐ」

天光光先生が大局的に物事を捉えていたこと、あらゆる面で女性の社会進出に取り組まれていたことを改めて再認識しました。

来賓紹介では、谷垣禎一自民党幹事長衆院議員、細川護熙元首相、綿貫民輔元衆院議長、河野洋平元衆議院議長、石破茂地方創生担当大臣、石原伸晃元大臣衆院議員、鳩山邦夫元大臣衆議院議員、尾身幸次元大臣、奥野誠亮元大臣また、ゲオルギ・ヴァシレフ・駐日ブルガリア共和国特命全権大使、日本赤十字社社長近衛忠輝・甯子様ご夫妻、など紹介しきれない程の人が参列致しました。

弔電紹介では、安倍晋三首相、高村正彦自民党副総裁衆院議員をはじめ、各大臣、各国大使など、各方面から多数寄せられている旨の説明がありました。

(皆さん国連防災世界会議出席で仙台)

その後、能楽囃子方大倉流大鼓の大倉正之助様による「献鼓」（本来は祝いの席で行われるものですが、天寿を全うされたという意味でご披露されました）がありました。天光光先生が新年に見ることを毎年楽しみにされていたそうです。

東洋英和女学院院長の深町正信様による献杯が行われ、お清めの食事となりました。立食形式でありましたが、お疲れの方には椅子を用意し、またはお持ちしてお座りになれるよう私たちは、心を配りました。

閉式では、先生のすぐ下のご令妹・松谷天星丸様のご挨拶をされました。「姉妹から見ても、本当にあっぱれな最期でした。姉は60歳前半に乳がんで片方の乳房を失い、その後も何度も死線を越えて参りましたが、一歩表に出ると、その事を一切感じさせない、痛みや苦しみを表に出さない人でした。…自分自身の陶冶、そして不死鳥のように活躍できたのも皆様のお蔭にほかなりません。心より御礼を申し上げます」と感謝の言葉を述べられました。

特に参列させて頂いた村岡・椎名・赤田は、櫻華塾で学び始めた頃、「光グループ」として天光光先生のお名前を頂き学んだ者として、先生の思いを受け継いで参ります。



自民党本部での打ち合わせ風景



レント王国大使令夫人

文責：石田 尊昭 一冊の会副理事長・尾崎行雄記念財団理事・赤田 美香子：櫻華塾グローリア部・識字担当

「偲ぶ会」に参列した人、参列できなかった人達の思いや思い出、感想を沢山の人達から頂きました。紙面の都合上許す限りランダムに取り上げ会の代表として万葉にまとめました。

一冊の会親善大使のカズンの漆戸啓さんからは、「参列させて頂き、天光光先生が平和を強く願い先駆者として行動されてきたこと、またその思いを受けて私達が平和への行動をいかに廃れることなく継続させていかなければならないかを強く感じました。生涯平和を訴え続けてきた心の中には、決して曲げる事なく一貫して平和への行動を貫いてこられた強い信念があったのだと思います。

一冊の会親善大使ドン・アルマス（桜庭伸弘・谷島力・諏訪修史）のメンバー三人は「画面に映るお元気な先生のお姿を拝見し、車椅子を押させて頂いた時の事を鮮明に思い出してもあたたかい気持ちになりました。1人1人を思い、世界へ行動を起こされたその強き姿を学び、平和へ対する思いのバトンを受け継ぎ、音楽を通じて平和を訴えていけるよう、これからも自身の技術と心を磨いて参ります。」という感想を頂いております。

塩谷千凵子さんは、「女性の人権の先駆者であり晩年は女性の地位向上に心を配り、俗にいう“天晴れな人生のお手本”を示して下った事に感動と感謝で胸がいっぱいになりました。」と語っておりました。

田村洋子さんは「櫻華塾で先輩の方々からお聞きしていたことの中に先生はいつも“私は不死鳥よ”と、仰っていたことが走馬燈のように甦って参りました。またこの日は結婚式等が同時にあり会場の雰囲気を変えないようにと、主催者側が心を砕かれ皆さんへは平服を徹底されご家族の回向様は天光光先生のお着物をお召でした。厳粛な中にも思いやり溢れた爽やかな、お別れが出来たことは生涯の宝となりました。」と感謝を述べておりました。

古川宏子さんは、当日は人数制限で参加出来ませんでした。参加者からの報告会の内容を聞き残念がっておりました。しかし、古川さんは「天光光先生は前向きな姿勢で貪欲に時代の流れをくみ取り、櫻華塾生の私たちよりも向学心に燃えておられました。先生をお手本に、“もう歳だから”という言葉は死語にして生涯青春の心意気で学んで参ります」と決意を述べられました。

一冊の会と共に約 50 年間を歩んできた岸田和江さんは「大槻会長から赤松良子先生が推進しているクォータ制について勉強しておられたと伺い、人生最後まで常に時代の流れに敏感にアンテナを張り研鑽しておられたことを知り、先生の歩んできた足跡（そくせき）がいかに偉大だったか理解できました。天光光先生の集大成の素晴らしさを知ったことに感謝です。」と語られました。

参加出来なかった皆さんから沢山の感想を寄せて頂きました。

- 正五位叙位
- 勲三等宝冠章
- 一冊の会として4月10日園田天光光先生の日（初の女性参政権行使の日を記念して）
- 平和賞
- 世界の女性に与えられるバラの勲章
- マダラの騎士勲一等（80歳を祝して）
- ブルガリア共和国における外人最高の榮譽スタナ・プラニナ勲一等
（国として独立90年と園田先生の卒寿を記念して）

——他多数——

<http://www.issatsu.jp>



編集：大槻明子・小山志賀子